

競技会レポート

関関同立戦

3年生 谷 壮大

10/20～10/26にて行われた第15回関関同立対抗グライダー競技会でピストを務めました。今大会の同志社からの選手は僕と4回生の山口さんの二人でした。選手だけではなく運営側としても参加するのは大変でしたがやりがいのある大会になったと思っております。そこで、この競技会レポートは選手としての観点だけでなく、運営側の観点も踏まえて書いていこうと思います。

準備期間

2年間、事故や台風の影響で大会が行えておらず、先輩方にもこの大会の経験者が少ないという状況で今大会の準備は始まりました。そもそも僕に至っては周回競技の大会に参加することがはじめてで「こんな僕がピストで大丈夫だろうか」と非常に不安を覚えていました。そこで必死で規定を読んで誰よりもこの大会のことを理解しようとしたのを覚えています。ですが不安に感じた通り準備の段階で何度かミスをすることもありましたが、OB様や先輩からのフォローで何とか開催に至ることができました。

集合日

集合日は選手としてより運営として忙しくしていました。オープン計画通りに進んでいるのか、開会式の段取りなどの主に最終確認作業ですが、楽観的なところがある僕もこの時は心配性になるほど何度も確認を行いました。

選手としては翌日の天気を見つつ、4回生の山口さんと打ち合わせを行いました。主力は山口さんとして僕はサポートに回るというものです。これまでチームとして大会に出場したことがなく、誰かと作戦を立てるといったことが新鮮でした。

1日目

この日は朝から雨が小降りでした。ランウェイに到着するころには止んでいましたが、雲の多い状態でした。

定刻になり開会式を行い、各大学がそれぞれ写真撮影という流れから学歌や部歌の斉唱を行いました。各大学が部旗を翻しながら、自校の歌を歌う。同志社大学航空部としてチームで参加することを、また選手はこれから競技が始まることを実感し気持ちが大なり小なり高ぶっていたと思います。

その後競技が始まりましたが、天候の事もあってか誰も周回には至らず、滞空点のみの獲得となり同志社は山口さんの23分のフライトによる13点の獲得となり、暫定の一位となりました。

2日目

2日目は横風のため午前だけの競技となり、点数にも結び付かず4校とも無得点でした。

またこの日には宮本部長先生がお越し下さいました。グライダーがどのように発航しどのような安全管理がなされているのか、ぜひ見てみたいと以前からおっしゃっており、先生のご都合上今大会に来ていただくことになりました。

体験搭乗の後、競技、ピスト周りを案内し、「いままで話で聞いていたものを実際に見れてよかった。頑張ってください」と応援の言葉をいただきました。

3日目

3日目は風向が変わる予報のため12時過ぎより南向き発航にて競技が開始されました。

この日は条件があり、立命の松田選手や関大簡

井選手がワンポイントクリアしていく中、山口さんが発航しましたが、滞空点のみの得点になりました。結果として、この日は周回したフライトはなく、ワンポイントクリアが最高得点のフライトになりました。しかし関大の筒井選手は高度違反のため減点となり順位は立命館、関大、同志社、関学となりました。

4日目

4日目は雨域がかぶってしまい、条件が見込めないことからクルーフライトのみになりました。

雨のため、撤収したのちは関関同立のクルーや選手が集まって索修理講習会です。関関同立航空部全体で基本的なスキルアップを行おうということです。廃棄索を短く切って修理したのですが、ここで全員で索修理の練習ができたことはプラスになったと思います。

5日目

5日目は北風が7～8メートル時折10メートルという強風の中での競技でした。離着陸にいつも以上に気を使うフライトを選手は強いられたと思います。ただ全国大会が行われる妻沼滑空場では、例年強風が吹いています。その練習になるフライトとしての意味も見出しつつ各選手はプランを組み立てていました。

しかしうまくサーマルをとらえることはできず、立命松田選手のみ滞空点を得点し同志社は無得点でした。

6日目

6日目は天気も良く、条件がありました。競技が始まって、立命松田選手が1時間の滞空、そし

て同志社は僕がサーマルをつかみましたがワンポイントのみのクリアとなってしまいました。その後立命小池選手や関大筒井選手がゴールし、立命と関大が大きく得点し同志社と関学を大きく突き放しました。山口さんもサーマルを見つけ粘りましたが24分の滞空フライトになりました。

この時点での得点は立命 1050 点、関大 875.2 点、同志社 195.9 点、関学 1 点でした。

7日目

7日目は天気は良かったものの、ポイントにはつながらず4,5分のフライトが目立ちました。同志社も得点はありませんでした。

その後、閉会式が行われ同志社の成績は団体3位、個人成績としては19選手中、谷が4位、山口さんが5位でした。

総括

今回の大会で同志社は久しぶりにチームとして大会に臨みました。クルーとして、選手として大会にどのように臨むべきか、この大会や続く東海関西競技会を通して理解していったと思います。このレポートの執筆時点で全国大会はまだ行われていませんが、チーム同志社として最大限のパフォーマンスを発揮できると考えています。また今大会は現役だけの力ではなくOBの差し入れや助言もありました。OBのご期待に添えるような結果を次の大会では出したいと思います。

選手として参加して今大会に思ったことは、日頃の訓練との「空気」の違いです。各大学が勝つために争うということが緊張感とそれに伴っての高揚感を醸し出していました。まだまだベテランの方々に比べて、この競技に足を踏み入れたばか

りの未熟者ですが、「グライダー競技」の楽しさの一端がわかったように思います。だからこそ個人4位という結果に悔しさを感じますし、団体3位の悔しさをバネに部全体で強くなっていきたいです。またその先輩の姿を見せることで後輩たちにも頑張ってもらいたいです。そうした循環を生み出す機会としても今大会はいい機会になったと言えるのではないのでしょうか。

今大会では運営としても参加しました。大会中は「発航権」といった普段の訓練にない要素に戸惑いながら、ただ効率よく訓練するために指示する立場としてのピストと公正に大会を運営するためのピストの動きや考え方の違いを理解できました。この違いは来年の関関同立戦の運営を担当する現2回生たちにもよく引き継いでゆく必要があ

ると思っています。またこの大会は関関同立戦です。4校が共催しているのだという意識の下、自分たちのしたい大会とはどんなものかを、主将に留まらずに考えていき発展させていくことが大事だと深く感じました。

今回の関関同立戦は3年前の開催の記憶をたどるので精いっぱいなところがありました。しかし来年度は今年の前例をもとにより良い大会に出来るのではないかと思います。

最終日、解散前に「来年もやろう」と選手同士で言い合いました。ただ競技をする場ではなくチーム意識を育み、スキルアップする場として、ライバル意識を持てる場として今回の関関同立戦は非常に有意義なものであったと感じました。

競技会レポートのうち、東海関西学生グライダー競技会と全日本学生グライダー競技大会については、両競技会に出場した選手からレポートの提出が無かったため、締切日を延長して提出を促したがそれでも提出されなかった。これまでに無い事であり、甚だ残念である。